

スタシスさんのこと

佐々木 秀明

去年、NDA画廊で、小さな銅版画ばかり集めたスタシス・エイドリゲヴィチウスというポーランドの画家の個展が開かれました。星空に続く線路に枕木を並べる男、そんな切ない孤独なイメージと奇妙なユーモアが交錯する、不思議な作品でした。僕は画家の、夜更けの静かな仕事場を想像していました。

この秋、初めてその画家に会うことができました。NDA画廊で開かれる個展のために、この画家がワルシャワから札幌にやってきたからです。今回の展覧会の作品は、テンペラとグワッシュで、少年・老人・男・女・星や鳥がモチーフでした。暗い背景、ぼつんと荒野にたたずむ孤独な魂、そんなメランコリックなイメージは、時に終末観的な印象を受けてしまいました。しかし、ペシミズムに流れないのは、画面の詩的な空気と、人と人、人と鳥、人と大地とが交感し得る、そんな気持ちになれるからかもしれません。会場で彼の絵本や仮面の作品の写真を見ることができました。豊かな色彩や、イメージの多様なひろがりには驚きました。

夜更けの密室の仕事場、そんな僕の勝手な思い込みは素敵に裏切られたのでした。僕もささやかながら小さなオブジェを作っています。僕の作品の写真を見せながら、画廊の長谷川さんが、スタシスさんに紹介してくれました。数日後、画廊から電話がありました。仕事のできる場所が欲しいらしい。

「小さな部屋ですが机とベッドならありますよ」

一週間、我家に泊まることになりました。我家は父母・妹・弟・僕と猫一匹という家族構成です。勤めの関係で、夕食に家族全員が揃うことは、まずありません。母はそれが気がかりの様でした。それに外国のお客様を迎えるのは初めてのことです。「ポーランド語なんて全然わからないね」

「英語が話せるそうだよ」

「そりゃ良かった。ところでうちは誰が英語話すの？」

思わず顔を見合わせて笑ってしまいました。誰もまともに話せないのです。

彼は大きな荷物を持って現れまし

た。二つの大きな鞆には、ポスターや絵本、絵の道具や描きかけの絵が山ほど詰まっているのでした。午後、弟と彼と三人で海に行きました。貝殻や小石や木切れを拾いながら、人気がない海辺を散策しました。帰り際、彼は砂浜に大きな大きな絵を描きました。少年と鳥と魚です。魚の尾ひれは海の中まで続いています。ヨーロッパの広場で見かけるストリート・パフォーマーの話をしました。

一杯やりながら、おしゃべりしながら、彼はペンを走らせました。その日の出来事、昨日の映画、僕の家族や猫、訪ねてきた友人たち、それらがきっかけになって、スラスラと絵が出来あがる様は楽しくスリリングでさえあります。ちようど手品、ちよつとした魔法を見ている様です。家族の集まる夜の小一時間、その雰囲気は彼はとても気に入っている様子でした。

息子さんの誕生日にラジコンカーを買いにいったこと、家族と一緒に開拓の村に行ったこと……。楽しい、刺激的な、あつという間の一週間でした。居間には彼の残していつてくれた絵が掛けてあります。いつの日かワルシャワの彼のアトリエを訪ねたいものだと思います。今度は僕が鞆に山ほど作品をつめこんで。

(インテリアコーディネーター・
2号87年12月)

一週間の間にポーランドのこと、彼の家族のこと、絵のことなどについて話ができて、少しずつ世界が広がって行く手触りは楽しいものです。夜の十時頃やっと家族が揃います。

夢の民族・未知の言語

藤原 興生

作家の司馬遼太郎氏のモンゴル、ロシア関係の様々なエッセーの中に、氏が少年時代から憧れ続けてきたブ

リヤート・モンゴル人について描写されている。これらの著書は、司馬氏得意の筆つかいで歴史観、民族観

を著し、読者を魅了してやまない。

司馬氏の言うところの夢の憧れの民族は、私にとってはポーランド人である。

一九八〇年から八一年には、連帯運動が盛んになり、全世界が固唾をのんで注目していた時、私は札幌市中央区宮ノ森に住む中学生であった。八一年の六月に西区発寒に越してきたが、中学生の頃の私は、ロシア語に興味を持ち始めロシア人を民族として非常に意識していた。そして、ポーランドやロシアについて考えたりしていた。

同年十二月にポーランドに戒厳令施行の事態。この頃、東ドイツの少女と文通を始めていた私は、隣国のこの人達はどう見ているのであろう、などと考えていた。また、ロシア人達はこの事態をどう聞いていたのか。

ロシア人といえば、十月に札幌で某協会のシンポジウム主催のパーティーの場で西シベリアのオムスクで建設関係の化学技師をしているガリーナという女性と親しく話し込んだ。

オムスクには、ドストエフスキーが一八五〇〜五四年まで政治犯として懲役刑に服していた都市として有名であり、私自身もこの大作家がオムスクでの体験をもとにして書いた

『死の家の記録』を翻訳で近々読むつもりであったので、私のつたないロシア語で、オムスクにはドストエフスキーがおりましたですね、と聞いてみた。彼女は私の質問に対し、そうですね、と相づちをうつやいなや、そのことについて詳しく説明してきた。残念ながら私には彼女のロシア語を理解する能力がない。

オムスクの監獄には、ポーランド人の貴族もいた。『死の家の記録』の中で、ドストエフスキーは、彼等の事もロシア人の目で鋭く記述しているし、彼の他の作品にもポーランド人が登場してくるそう。その事が頭にあつたので、オムスクに住んでいるガリーナさんにポーランド人かどうか聞いてみるか、と聞いてみた。それに対して彼女は、こういう民族的な事には関心がないのか、答えようがないのか、白けた表情を顔に出した。私は彼女の様子から私のロシア語がはつきり通じなかつたと思い、日本人の通訳を介して再度聞いてみた。彼女は未だかつてポーランド人を見た事がなく、何とも言いがたいと言ってきた。これは、もっともな話である。ただ私としては、本能的に民族として語ってもらいたかつたので、でも同じスラヴ民族な訳でしょ、と単刀直入に言ってみた。すると彼女

は、「ダー、ダー」と言う、スラヴという事ね、と私の意味する事を悟り、自分達は、ポーランド人の言っている事を全部ではないが、部分的に理解できると言っていた。

彼女は又、自分達のスラヴ語の共通性を日本語と朝鮮語の関係と同じであると感じているらしい。

ポーランド語といえば、八一年にポーランドの情勢が動揺していた頃、テレビのニュースで、ポーランド人のアナウンサーや政治家の話すポーランド語が最初であつた。今にして思うと、当時の情勢がきっかけになつた事は確かだと思う。少年の頃、何かにつけてロシア語の響きを聞いていた自分にとつて、最初のポーランド語を聞いた時は、ちよつとした驚きであつた。今でもポーランド語というのは、やたらに子音が続いて小刻みに発音される上に、最後の部分に「シチ」とか「ジェ」で終わる語彙が多いという気がしている。

この頃、大通りの紀伊国屋書店の語学書売り場に行くのが何よりの楽しみであつた。今でも変わらないが、英独仏の教材が山をなしていたが、これに對抗するかの様に白水社刊の未知の言語シリーズの「ポーランド語の入門」「チェコ語の入門」「ルーマニア語の入門」など東欧の諸言語

の入門書が並べられていた。「ポーランド語の入門」が私の興味を引いた。この時不思議に思ったのは、何故ロシア語はキリル文字で、ポーランド語はラテン文字かという事であつた。又、格変化の名称が両言語とも、主格、与格などと表示されているのも面白いと思つたものだ。それ以来、ポーランド語は私にとつてロシア語同様専攻したいとまで思つた神秘的な言語になつた。

私には、ヴロツワフ市に住む文通相手、アンジェイ・アマノヴィチ君は来ないが、充実した内容の手紙をくれる。

片言のポーランド語で将来ポーランドを旅するのが私の大きな夢である。

(学生・発寒在住・2号87年12月)

ポーランドと私

本間 富雄

どういうわけか、ドラマで落城の場面がでてくると、妙に血が騒ぐ。会津の白虎隊や、城山の西郷隆盛や、「風と共に去りぬ」から「忠臣蔵」まで、筋書きがわかっている、見飽きない。そこに、滅びの美学のようなものがあるのかもしれない。

しかし、どちらかと言えば、潔く散る者より、無念の思いで城を落ちのびる者の方に、より興味がある。苦節数十年再起する者や、何世代も世を偽り、身を隠し続ける者の方が、屈折していて奥行きがあり、人間くさい。

好きな物語はと聞かれれば、やはり、三国史か、平家物語である。

私事で恐縮だが、私の父の家系は、曾祖父の代まで平家の姓を名乗っていた。江戸時代、どう取り入ったか旗本になり、何代か奉行職を勤め、幕末には徳川慶喜らと駿府に落ち、彰義隊の落武者をかくまったりした。私自身も難民体験があり、一九四五年、ソ連の戦車に追われて脱出した家のカギは、さびついたまま、今でも未練がましくタンスの中にある。

ポーランド映画、アンジェイ・ワ

イダ監督の「地下水道」「灰とダイヤモンド」「大理石の男」「鉄の男」など一連のドキュメンタリーは、制約された状況の中で使われる言語の意味の二重性が、なぞ解きのようにおもしろい。彼の作品は、裏切りへの苦渋に満ちているが、歳月がそれをいやす「許し」のようなものがある。その映像やせりふは、陰影に富み、エキセントリックで、記号の解読のように、何度見ても、そのつど新しい発見がある。ワイダは私と同世代である。彼の父が、ポーランドの栄光のシンボルだった騎兵隊将校であり、ソ連軍の捕虜となり、カチンの森で殺されたことを最近知った。

最近、社会主義国の映画がさえてきた。中国の謝晋監督の「芙蓉鎮」も、時代にこびて生きる人間の迷妄と矛盾を鋭くえぐっていた。

かつて社会主義は、若者たちの希望の星だった。その国で労働者がストライキ権を求めて立ち上がったというニュースは、意外性より新鮮な驚きがあった。自主労組連帯のワレサ委員長が、ストに突入した日、仲間たちに酒を飲まないよう提案し、

それが受け入れられたという報道は、更にホットだった。弾圧や迫害よりも、酒や供応で骨抜きにされる方を気にしたというのが、いかにもポーランドらしい。

千年の興亡の歴史と、騎士道精神と、美女と酒で有名なこの国は、社会主義でありながら今でも、女性にハンドキスする優雅な習慣を残している。労働組合の闘士が、敬虔なカトリック教徒であり、激情的な行動と、おっとりした物腰が、アンビバラントに共存するこの国の民族性は、社会心理的にも、興味はつきない。

札幌で、「ポーランド問題を考える会」を作ったのは、連帯運動が規制され、しだいに不自由になってきた八二年の初めである。東京の工藤幸雄氏から札幌の沢田誠一氏に電話があり、私が沢田氏から相談を受け、それぞれの知人に呼びかけてみようということになった。第一回の会合は四十人ぐらい集まった。当時衆議院にいた横路氏も参加してくれた。とりあえず事務局の窓口を、秘書の斉藤那昭氏の所に置き、毎月一回の割合で、研究会、講演会、映画会等の行事をすることにした。横路氏夫人由美子さんもよく顔を出してくれた。現在のポ文協の人たちとのつき合いも、そのころからである。

ワレサ氏が連帯を代表してノーベル平和賞をもらったとき、札幌でも、有志がささやかな集会を開き、同氏に祝電を送った。しかし、電報局の説明によると、ポーランドの本人の手もとに確実に届く保証はないとのことだった。

私がポーランドの人たちと直接出会ったのは、八三年、国立舞踊団「ガイク」を日本に呼んだときである。東欧芸術家交流協会から横路氏の所へ協力依頼が来たのだが、そのときすでに知事の公職にあったので、結局自由な立場にある私が個人の責任で、北海道公演を引き受けることになった。

全員、ワルシャワ大学出という明るく元気な彼らとの毎日は、歌や踊りだけでなく、知的な刺激の面でも忘れられない思い出となった。いづれどこかで光っている監視の目を気にしながらも、連帯や、対ソ感情や、日本への熱い思いを率直に語ってくれた時の、スリルや興奮は、私にとつて異文化との貴重な体験であり、衝撃だった。彼らが、帰国後どうなったかはわからない。ひとりひとりのその後の六年は、ワイダの映画の続編のシナリオにもなるようなドラマに満ちていることだろう。

(札幌学院大学教授・6号89年4月)

読者からの手紙

吉田邦子

協会の一周年にあたり、ころよりお慶び申し上げます。私は以前からピアノを通じてショパンの国、ポーランドに興味を持っていたのですが、会員になって以来、より一層親しみを感じるようになりました。また、現在私はオーストリアのウィーンに住んでいるのですが、ここに来ることになったのは、ポーランド出身の人と知り合い、近く結婚することになったためなのです。北海道とポーランドに生まれた者が偶然出会い、ここオーストリアに住んでいる訳です。幼い頃から頭の中で思い描いていたポーランドですが、偶然にもこの国が身近なものとなり、これからは私も第二の故郷として、その伝統を受け継ぎ、学び、生きていくこととなります。まだ訪れたことは

ありませんが、話を聞くたびに、とても美しい国であることを、また人々のメンタリティーにも共通のものがあるように感じます。北海道とポーランドを結ぶ貴重な文化協会も誕生し、交流に力を尽くされていることでもあり、これから私も北海道とポーランドの相互理解、文化交流などに、僅かながら力になるべく努力していくつもりです。

こちらウィーンもかなり寒く、雪が降っています。札幌でも雪がちらついている頃でしょうか。これからますます寒さが厳しくなりますので、どうぞ健康に気をつけてお過ごし下さい。

ではまたお便りします。

(一九八八年十一月二十八日、

ウィーンにて・6号89年4月)

我が心のポーランド

霜田千代磨

「ただちにプロツワフ市に来られたし。待っている。グロトフスキー」。オーストリアのウィーン駅から発信

されたその電報を私が手にしたのは一九八二年六月末日の事である。一週間後の七月八日、西ドイツの

フランクフルト中央駅からワルシャワ行きの国際列車に乗り込んだ私は、丸二年ぶりにポーランドの国境を越えた。

私が初めてポーランドへ留学した一九七二年は、札幌冬季オリンピックの年。奇しくも、その時の九十メートル級ジャンプ競技において、ポーランドから参加したフォルトナ選手が百十一メートルを跳んで優勝した年であった。

一九八〇年に、ウツジ大学付属の外国人のためのポーランド語学校に在学した私は、その次の年、ポーランドの西南部シロンスク県の首都ヴロツワフ市(人口七十万)にある世界的に有名な前衛演劇運動の推進者グロトフスキーの主宰する実験劇場の試験を受けた。希望者が多く二百人近く受験した中で、米国二、フランス一、デンマーク一、西ドイツ一、オランダ一、日本一、の七人が実験劇場で仕事をすることを許された。そのうち女性は米国のマージン一人、日本人では私が初めてであった。正式な名称を「俳優研究所実験劇場」といい、ポーランド政府高等文化芸術省直轄の研究所である。したがって、ここで仕事をする人間にはポーランド政府から奨学金が支給され、政府招待者となる。

以後、私とポーランドとの縁(えにし)は切れず、実験劇場の仕事に携わってから丸九年の歳月が経った。なぜ、かくまで身体的にも精神的にもきつく過酷な実験劇場を私は必要としたのか? それは私が仏教の勉強をしている浄土真宗の僧侶であり、現に田舎の寺の副住職であるということと密接に結びついている。

僧侶といえども、日常生活に流され、埋没し、世間的な追従と虚偽の中に安住せんとする。そんな自分にとって、真に厳しい自己との戦いの場が欲しかったのである。空気、大地、水、光などの自然との触れ合い、あるいは言語、民族、文化、宗教を異にした外国人との共同生活、一つの研究テーマを目的とした身体を通じた理解と、具体的な修行の場がポーランドのグロトフスキーによって私に与えられたのである。

今回の仕事は一九八〇年からグロトフスキーが中心となり、継続して実践追求している「演劇の源泉」という課題を目的としたプロジェクトに対する参加である。

グロトフスキーの思想の中には、「人間は民族、言語、宗教、文化の違いを越えて互いに共通の問題について、理解する事ができる」という考えがある。

森の中の小屋という、社会生活と
しや断された場所(空間)において、
グループの人間が生活を共にし、自
然のもろもろのエネルギー(力)を
媒介として、一つの研究課題を身体
を通して理解することが出来る。こ
れがグロトフスキーのアクティブ・
カルチャー(行動的、積極的文化)
という理論である。その具体的な研
究課題の一つが今回のプロジェクト
であった。

参加した基本グループのメンバー
は、コロンビア人、メキシコ人各
一、インド人(ベンガル人)、ポー
ランド人各二、それに日本人の私を
含めて七人であった。以上の参加者
は一九八〇年の第一次「演劇の源泉」
プロジェクト以降の基本グループの
メンバーであり、一九八一年八月よ
りポーランドで、また一九八二年一
月より六月までイタリアにおいてこ
の研究課題と取り組んできた顔なじ
みである。

このことから理解できるように
「演劇の源泉」プロジェクトとは、単
なる演劇のためのワークシヨップで
はなくして、人間が日常生活を営ん
でいく上での「人間の本質にかかわ
る基本的な動作」という事ができる
かと思う。仏教のことばでいう「行・
住・座・臥」である。それは、起きて

顔を洗って、食べて、座って、眠って、
廁(かわや)へ行って、という動作(行
為)の内容である。

森の中という人間の源泉を呼びも
どす環境(空間)の中で生活する事
により、人間の源泉に根ざしたトレ
ニング(訓練)を行う。日常生活と
トレーニングとは同じリズム(波長)
で行われる。課題の目的をもう少し
具体的に説明すると

(イ) 日常生活の基本的にして、重要
な動作(行為)でなければならぬ。
(ロ) 非常に単純な動作でなければな
らない(例、歩く)。
(ハ) 整息と一体化した内観と聴事で
ある。

つまり、日常生活とトレーニング
は互いにかい離し、断絶した異質の
ものであつてはならないということ
である。物質文明と現代生活の中で
衰弱した人間の生命(精神)の回復
と新生をはかる。森の中で身につけ
たものや身体を通して理解したもの
を、また普段の社会生活の中に持ち
帰り、持続させ継続させていく。
人間とうまれて、人間として生き、
人間として死んでいくという「人間
の源泉」を明らかにしていく立場が
宗教としての仏教であり、真宗であ
るといえる。

「歩く」とは、人間が生きていく

上での基本的な行為である。それは
一人の人間のファイナル(終末・死)
までの平凡にみえて重要な行為であ
る。一人の人間が一定の自然なリス
ムで歩くという訓練を「強い・繰り
かえし・さとる」システムを「演劇
の源泉」の課題にすることによって、
グロトフスキーは「歩く」という行
為の中に、人間が「生きる」という
事の意味を深く考えているように見

クロー先生のことなど

吉田 宏

クロー(Ueny Krah)先生はポーラン
ド第二の都市ウツチにある工科大学
の教授で、放射線化学研究所の所長
である。連帯運動の高まりの中で大
学内の選挙による最初の学長になら
れた。

一九六五年の三月、私は留学先ス
ウェーデンからの帰途にそこで知り
合った友人を訪ねてポーランドへ立
ち寄ることになった。まだビザの手
続きが不自由なポーランド訪問を実
現するために、友人は研究所を公式
訪問するということにして招待状を
送ってくれた。それがクロー先生か
らの招待状で、私その後クロー先
生と、そしてポーランドと長い付き

える。まぎれもなく「歩く」という
行為は、連続無窮(きゆう)にして
人生(日常生活)を貫いているもの
である。従つて実験劇場で彼が行つ
ている「演劇の源泉」プロジェクトは、
宗教的な内容に深くせまつたもので
ある。

(元グロトフスキー実験劇場研究生・
空知管内北村浄土寺住職・

7号89年7月)

合いをするスタートとなった。ただ
遊びに行くという当時としてはいさ
さか後ろめたい動機で興味本位に訪
れたポーランドであったが、クロー
先生にはじめて一人前の研究者とし
て遇され、大勢の先生と学生の前で
晴れがましい学術講演をすることに
なつたのである。

まだ満一歳にもならない息子と、
それを抱いた母親と、三人分の荷物
を持った私とがワルシャワ空港の小
さな通関の建物の中で行列の最後尾
に並んでいると、税関の係員が手招
きして何の検査もなく私たちを先に
通してくれた。ワルシャワからウツ
チへわれわれを連れていってくれる

はずの研究所の車が運悪く雪道でスリップして大きなオイル運搬車に衝突してしまった。妻が田舎の病院に救急車で連れてゆかれた。初めての日本人だというので寝たきりの患者を除く病院中の人が治療室を覗きにやってきた。少しか英語をしゃべれる医者が一人いて、怪我は軽いがシヨックを受けているかも知れないのでここに二、三日泊まって行けと親切に勧めてくれた。予定よりかなり遅れたが、講演を済まし、歓迎のパーティーに招かれた。薄く切ったパンの上に肉や魚や野菜を賑やかにのせたサンドイッチを何度もすすめられて、あまり食べると後の主菜が食べられなくなるとジョークのつもりで答えクロー夫人を慌てさせた。特に別室で暖かい料理をいただくことになったが、もちろんこれは予定外のこと、ポーランドの習慣を知らない私の失策であった。

一九七七年にクロー先生が家族とともに札幌に半年間滞在されることになった。クロー先生が北海道大学の我々と共同研究をする計画を日本学術振興会という国の機関が援助してくれることになったのである。ちょうど年頃の一人息子ジョン君を白楊小学校の六年に入れてもらった。言葉のせいで退屈のあまり、時にはク

ラスでいたずらをし先生を困らせたらしいが、算数では能力を発揮したという。北二十四条にある北大の外国人用アパートに入居する手続き、ジョン君の入学手続きなどを手伝ったり、夏休みに北海道を数日間ドライブしたりして、個人的には親交を深めた。しかし、話はおおむね放射線化学の仕事のことが中心で、日本・ポーランド間の文化交流なんかを話題にしたことはなかった。

クロー先生が日本にどうして興味を持たれるようになったのかわからない。日本滞在から数年してウッチにポーランド・日本協会を設立し、その会長になられた。ことあるごとに、札幌にも同種の協会をつくるようにと私に勧められた。同じような働きかけがいくつかのルートであったようである。一九八五年にクロー先生が主催する放射線化学の国際会

二十六年前のこと

四半世紀前のことである。昭和三十九年の春から初夏にかけて、ポーランドへ出張の機会を得た。農業国としてのポーランドは、戦前から、砂糖の原料となるビートの生産が多

議に出席するためウッチを訪れたとき、ポーランド・日本国際交流ウッチ・札幌と色塗された木製の立派な飾り皿を見せられた。これを持って帰ると大変なことになると心配したが、熱意に負けていただいてきた。私の仕事部屋に飾った木皿の重圧に耐えきれず、北海道ポーランド文化協会設立準備会の開催のために分不相応にも動き始めたのが一九八七年三月頃であった。十月に協会が発足し、翌年の四月にはクロー先生から「キューリー夫人の業績と生涯」という話を協会の例会として聴くことができるようになった。

一九八九年の文化の日、日本とポーランドの間の国際交流に尽くした功績により、クロー先生に勲三等の叙勲があった。
(北大工学部教授・10号90年1月)

富山 信夫

く、当時北海道でもポーランドから種子を輸入、栽培していた。もっと良い品種をとということで、取引先の農産物輸出入公社(LORIMPEX)の世話で、ワルシャワの農林省種苗局や

砂糖工業研究所、クトノ、クオダパやクラクフのビート育種場、ビドゴシチの農業試験場などで仕事をしてきた。当時のことを思い出すま――何しろ二十六年も前のことである。

富山ゆくえ不明

日航北回り便で羽田発、コペンハーゲンでポーランド航空(LON)に乗り換え、ワルシャワ着の予定であったが、コペン上空が視界不良のため、急遽ロンドン着陸に変更された。目的地まで責任をもって送るとのアナウンス。予定変更のことを相手に連絡したいと日航窓口に申し出たが、ポーランドとは直接の連絡網がなく不可能とのこと。心細い思いでブリュッセル、パリ、東ベルリン経由でワルシャワ空港に到着できた。ところが、コペン発ワルシャワ行のLOT便は予定通り運行し、それに富山が乗っていないということ、早速日本にテレックスが送られ、一時富山行方不明が伝えられたことを後で知った。

イクコ・エンドーを知っているか

夜遅くホテルに到着。早速、外国人登録(POTWIERDZENIE ZAMEL-DOWANIA CUDZOZIEMCA)の届出。翌朝LORIMPEXに電話。やっと迎えのスタジェンスキ氏と会うことがで

きた。「ミス・イクコ・エンドーを知っているか」「ピアノリストの遠藤郁子さんなら同じ北海道の出身だ」「貴殿は間違いなく日本からの客だ」と歓迎された。シヨパンコンクールは遠藤郁子さんはポーランドでは大評判とのことで、今でも強く印象に残る嬉しい話題であった。このことを、二十五年経った一昨年、北海道ポーランド文化協会総会で遠藤郁子先生に御報告したところ、懐かしい話と大変喜んで頂くことができた。

人々との交わり

ポーランドでは、まだ日本人が珍しい時代で、色々な人に会い、沢山の人の世話になった。直接御指導を賜わった育種の重鎮コラゴ博士・フィルトビッチ教授——ともに物故——案内や説明役を受け持たれたスタヂェンスキ氏・ルビンスカさん・パヴェウスカ博士・ラホスキ博士、日本人を初めて見たという取材カメラマンの娘で中学生のハンナさん。方向がわからなくなつて困つていた私を目的の銀行まで案内してくれた雑貨店のエバ嬢など本当に沢山の人のことが思いだされる。

恩師北大農学部工芸作物教室の細川教授(当時)と米国留学が一緒で友人だったヤッセン博士にも色々

お世話と歓待を受けた。そして今、ポズナン農科大学からグジェゴジエ氏が北大同教室に留学中で、ポーランドとの交流が拡がってきた。また、北海道ポーランド文化協会の活動など感慨一入のものがある。

ポーランドの人と国

ゴムルカ政権の最盛期であった。イースターの夜は丁度クラクフ滞在中で、街中荘厳な雰囲気につつまれ——うまく表現できないが——これこそ本当のポーランドの姿ではないかと強く感じたことを覚えている。

ある時、地図を前にして、ポーランドと日本のことに話題が発展し、国境に対する歴史的感覚・意識の違いをまざまざと知らされたことも覚えている。国境は単にあるものだという意識しかなかった私に、彼いわく、国境は作られるもので動くもの、待てば必ず機会が来るものだ。二十六年経った今、我国では予想もできなかった北方領土問題が紙上を賑わすようになった。

ポーランドも今、歴史的大変革の真つ只中にある。ポーランドらしい知恵ある行動と解決を念じて止まない。

(北海道糖業株式会社勤務・

11号90年5月)

クラコフに想う

吉本康子

冬にしては雪が少ないこのごろです。地球温暖化のあらわれでしょうか。そんな札幌で「ポーランドのANIPONOV展」を見に行きました。クラコフ国立美術館の協力によるヤシェンスキーのコレクションは、私に日本文化を再発見させてくれました。彼は、「……浮世絵は色彩の音楽、音楽が耳を愛撫するように目を楽しませる」という。この不思議な統合的感性は、東欧、クラコフの風土によつて磨かれたに違いありません。

前訪れたクラコフを思いだすと、シヨパン、キューリー夫人、ヨハネ・パウロ二世、「連帯」など様々なポーランドの顔が見えます。私は、これらの光はいつまでも世界の人々の心を照らすと思います。

このような、文化の薫り高いポーランドと、「ポーレ」を通して親しくなれるひとときを、私は大切にしています。それは、ひごろ忘れかけている「何か」をとりもどしてくれるからです。

この文化協会が今後も民主的に運営され、ひろく市民の気持ちを反映し、両国の文化の再発見に役立つことを期待しております。

(主婦、札幌在住・
13号90年12月)

ストラドフスキ氏を想う

小笠原 正明

今年の三月に北大から北海道教育大学の函館分校に移り、とりあえず函館で単身赴任生活をしています。

スーパーマーケットに買い出しに

行って、函館の豊富な食料品を眺めていると、つい今から十二年前のポーランドでの「単身赴任生活」を思い出します。函館と違って、あれは大

変な生活でした。

十二年前といいますが、ちょうど「連帯」の最盛期で、国中に清新の気が充満していましたが、それに反比例して国民の生活はどん底に落ちていました。みんな午後二時には勤め先をあとに食料の確保に出かけたのです。私も人波にもまれて、倉庫のような殺風景なスーパーマーケットによく行きましたが、食欲をそそるようなものは何もなく、石のように硬いパンとマーガリンを買って帰るのがせいぜいでした。一時はそのパンも店から姿を消して、「これは！」と思つたものです。ただし、私はいずれにせよ三カ月間の短期滞在の客員(準)教授だったので、いざとなったら国境を越えて脱出すればよいと気楽にかまえていました。むしろ、いかにも歴史の転換期らしい人々の勇気ある行動に新鮮な衝撃をうけました。とくに、私の世話をしてくれたストラドフスキ氏には、今でも尊敬と敬愛の念を感じています。

ストラドフスキ氏は、アメリカのアルゴンヌ国立研究所から帰ったばかりの私と同年輩の科学者でしたが、そのころウッチ工科大学の「連帯」の責任者であつたようです。彼の研究室には毎日屈強な労働者風の人が

ちが集まつて、猛烈な議論をくりかえしていました。ポーランド人のおもしろいところは、そういうところで外国人が居てもいつこう平気なことで、ストラドフスキ氏は私にこれこれこういうことが議論されているのだよ、などと解説してくれたものです。彼や研究所の人たちの説明から、刻々と動く政治情勢が一応理解できました。連帯のピラが初めて街に張り出された時とか、ウエイトレスが一斉に連帯のバッヂを胸につけたときなどは、水面下の大衆が突然すがたを現したようなめざましい印象をうけました。

グダニスクで政府と連帯の会議が開かれたときのこともおぼえています。彼の研究室には大勢人がつめかけ、つぎつぎに入る情報を真剣な表情で聞いていました。そして、どういふわけか、ストラドフスキ氏は本人は私との約束をすっぱかすことなく実験につきあつてくれていました。そして新しい情報が入るたびに、「ちょっと待ってくれ」と分光器の置いてある部屋を出て行つては、グダニスクに派遣されたウッチの代議員にああしろこうしろと電話で指令していました。私自身は、ポーランドの歴史的転換のとんだ邪魔をしてしまったのではないかと、今でもくや

んでいます。

私がポーランドをあとにしてからストラドフスキ氏がたどつた運命は数奇なものでした。彼は一九八一年に始まつた反動の嵐の中で逮捕され、正確にはわかりませんが二年ぐらい投獄されていたようです。その後、大学に復帰しましたが、一九八八年にアウトバーンで交通事故に遭い、

連帯の勝利を見ることなくこの世を去りました。そのことを私はドイツ人の教授から国際会議の席に聞かされました。

いま私の手元には、連帯の最盛期に彼と行つた研究の論文が一つ残されています。

(北海道教育大学教授・

19号92年8月)

壊れ壇のミラーボール

——ポーランド随想——

霜 田 千代磨

一、三つの言葉

最初に僕が覚えたポーランド語は三つであつた。その一つはワルシャワで草鞋を脱いだ時に世話になつたポーランド人に、冗談混じりに教えてもらった「カラビン」は「空ビン」にあらず「鉄砲」の意味だという事

その三つの品物はポーランドの歴史、「戦争と平和」「光と影」の生活を象徴している言葉のように僕には思えた。

二、留学前夜

テレビでポーランド映画をやつていた。ワイダの「灰とダイヤモンド」、カワレロピッチの「夜行列車」等々。

僕が初めてポーランドへ留学した一九七二年は札幌冬季オリンピックの年であつた。奇しくも、その時の九十メートル級ジャンプ競技において、ポーランド人フォルトナ選手が一メートルを跳んで優勝した年

僕の原体験である。

である。これで、札幌の名前はポーランド社会主義人民共和国じゅうに知れ渡る事となった。オリンピックの賑やかなスキー競技の外に、僕が薄暗い茶の間の電灯の下で呼吸を殺す思いでテレビで見た最初のポーランド映画が「灰とダイヤモンド」と「夜行列車」であった。

モノクロ映画の醸し出す、けたるような、スローテンポの流れ、それでいて異次元世界の一種緊迫した「何かアルモノ」を非常に緊張を通りこした恐怖の思いでみていた事を昨日のように思い出す。

勿論、息苦しさや緊張感は映画の内容とも関係があったが大方は一身上の理由、ポーランド留学が決定していたという事であった。

異次元世界の「何か、アルモノ」とは僕にとつては「ポーランド社会主義人民共和国」全体を指していた。

映画のテーマがテロルであれ、何であれ、フィクションとは判つてはいても、その映画に出てくる全部が僕にとつてはリアルタイムのポーランドであった。

それは、正に未知との遭遇と呼ぶに相応しいものであった。そして、強烈な印象とショックはポーランド留学を前にした僕自身の心にポジとネガとなり刻印された。

(三) ウッジ

イリュージョンのプロペラ機で羽田を飛び立ちモスクワ経由でワルシャワに着き、しばらくワルシャワで草鞋を脱いでから、汽車でウッジに向かった。ウッジの駅を降りるとポプラか何か、高い木の上でカラスがガアガア何羽も鳴いていた。9月とはいえ、すっかり秋のたたずまいであった。

公園の角などいたる所に赤旗が何本も立っていた。最初、生理的に緊張感と恐怖感を覚えた。しかし、それもすぐに慣れた。電車も赤、バスも赤、プロツワフ市の青い電車を見たときは本当に新鮮に感じた。

ウッジ大学附属、外国人の為のポーランド語学校は苦しかったけどたいへん楽しかった一年間であった。

最初の一カ月くらいは頭が痛くてまいった。朝八時過ぎから午後の四時半、五時頃迄、生まれてから、聴いた事もないワケのワカラナイ言葉での授業を受け、ラジオもポーランド語、何もかにもポーランド語、まったくチンプンカンプンであった。しかし、毎日毎日やられていると薄紙をはぐように少しずつ理解できるようになり、三カ月を過ぎたら買い物にいつても、指をささなくても言葉

で「何をどれだけ下さい」と言えるようになった。それから六カ月、一年、一年半、二年、三年と少しづつ

クラコフからカシューブまで

—わたくしのポーランド熱—

栗原 朋友子

時には無性に旅に出たくなることがあります。それも狭い日本国内ではなく、海外の未知の世界に出て、異質な文化にふれてみたくなる。新しい発見に胸おどらせ、それを心のひだの奥にたたみ込んで、与えられた人生をより豊かにする意味で私は旅に出たいおもいかられていたのです。

ちょうどそんな折りもあり、五年に一回開催される国際スラビスト会議(第一二回)に主人が参加する機会を利用して私も同行することにしました。この国際スラビスト会議はクラコフのヤギェウオ大学を会場として開催されたので、今回はクラコフに一週間以上滞在しました。

日本の旅行社はポーランドの情報に通じていないと言っても過言ではないと思われることがあります。日本からはグループ旅行団を組んで

相手の言うことを理解し、こちらの考えも喋れる様になったのである。(24号93年12月)

学会に参加する十一名が成田を出発しました。

八月末、クラコフに真夜中についた私達の一行はホテルに着くまで宿泊地がユダヤ人地区であるとは誰も気づきませんでした。旅行社が予約した三階建ての新しい小さいホテルにチェックインしたとたん、普通はユダヤ人以外は泊まらない宿の客となった日本人一行は誰しも異様な思いにとらわれました。

私達のユダヤ人特別居住地区のカジミェシュでの生活はこうして始まりました。私は映画「コルチャック先生」「シンドラーのリスト」をおもいだしました。「コルチャック先生」の映画では、医師のコルチャック先生がユダヤ人の印「ダビデの星」の旗を高くかかげて子どもたちの先頭に立ち、子供たちの恐怖心をやわらげ、人間としての尊厳を守ってやる

ことに心を砕きつつ、子供たちと一緒に死出の遠足に出かけるといいうストーリーでしたが、いつまでもその映像を忘れることはできません。「シンドラーのリスト」でも、ユダヤ人を迫害するナチスという強大な組織にうわべは従順をよそおいながらも敢然と挑戦し、個人の力で千二百人を超えるユダヤ人を死の運命から救出したドイツ人実業家の物語でした。

これらの映画のことに共に、アウシュヴィツ強制収容所を北海道ポーランド文化協会主催一九九七年のポーランド旅行の折りに見学したことが頭によりがえりました。映画「シンドラーのリスト」は、このカジミエシユ地区でロケーションが行われたことを知り、映画の場面を頭に浮かべながら、シナゴグを見学し、廃屋と化した建物が立ち並ぶユダヤ人の住居跡などをみて、第二次世界大戦がポーランドにもたらした民族浄化の爪跡を感じました。

十日近いクラコフでの生活が終わりに一行はグダンスクに旅をしました。ここでもまた新しい発見がありました。

これまで何回も訪れたポーランドの中でも私にとって未知の地方であったカシューブ地方に行くことができました。今回訪れたのはカシュー

ブの中心の一つ、カルトウーズイの周辺でしたが、風光明媚なこの地方の景観は神話化されて伝えられていますので、ここに紹介いたします。

主なる神様が天地をお創りになったとき、神様はご自分のお創りになったものをすべて見渡されて「すべてよし」と言われました。その言葉にすべての天使は歓喜の声をあげ、神様のみ業をほめたたえました。

ところが、ひとりの天使だけが悲しげな面持ちで光り輝く天の大広間の片隅にすわっておりまして。それは「憐れみの天使」でした。

「なにか心配なことでもあるのかね？ どうしてそんな悲しそうな顔をしているのかね？ わたしが自分の言葉によつて創造したこの世界が美しくない、とても思うのか？」と主なる神様はその天使におたずねになりました。

天使はおおずと答えました。

「いえ、すべては良いのですが、あの荒涼としたカシューブの不毛の砂原と無数の岩石を見てみると、わたくしはどうしても喜べないのでございます。」

そして「憐れみの天使」は創造主の前にひざまずいて言いました。「主なる神様！豊かな実りをもたらす

地を少しばかり余分にお持ちではないでしょうか？」

そこで神様はもう一度世界を見渡されて、一点を指し示されました。そこは肥沃な土地で、水の澄んだ川と湖、陰をなす樹々、花咲く灌木、優美な山並み、かわいらしい谷がありました。

「さあ、これをあげよう。君の心に適うようにするがよい」と神様は仰せになりました。

そこで「憐れみの天使」は特別に与えられた土地の一部を取って、カシューブの真ん中に投げて、そこを「マリアの天国」と名づけました。

こんにちその地方は「カシューブのスイス」と呼ばれ、カシューブ随

一の山柴水明の景勝地として人々に親しまれています。

(「アレクサンデル・トライヒエルのカシューブ地方の伝説集」より)

このようにポーランドのなかでもポーランド語とは方言以上に異なる西スラブ語の一つである「カシューブ語」を今でも用い、バルト海沿岸スラブ人の風習を保っている地方に行くことができ収穫の多い旅でした。

ポーランドでのさまざまなかごとを思い出すとき、体の芯にこころよい微熱が残っているような感じがします。これは私のポーランド熱とも言えるべきものでしょう。

(41号98年12月)

NUTY KASZUBSKIE
KASZĘBSCI NUTĚ



To je króćci, to je dludzi
To są kaszëbsko stolëca
To są basë, to są skrzëpci
To oznóczô Kaszëba

To są hócì, to są ptóci
To są prusci póltrojócì
To je kleka, to je wól
To je cale, a to pól

To je rydel, to je tycz
To są chojnë, widlë gnojne
To je prostë, to je krzëwë
To je tylni kolo wozné

To je mali, to je wiöldzi
To są instrumenta wszócì

カシューブ地方の言葉を図で示した譜面

ポプラの綿毛

今年もポプラの綿毛が舞う季節になりました。この時期になると、ポーランドでも綿毛が雪のように舞っていた光景を思い出します。私は一九九三年二月から八月までの半年間、日本語教育と日本語教育事情の調査のためにポーランドに滞在しました。帰国後札幌にすむようになり（出身は香川県）感じるのは、北海道はポーランドのようなどころだということ。長い冬、美しい春、短い夏、黄金の秋といった季節の移り変わり等、自然環境に関しては、北海道と四国よりも北海道とポーランドの方が近いような気がします。

帰国後ポーランド文化協会に入会し、ポーランド語講習会にも何期か

柏木 由美子

参加させていただきましたが、現在は子育て休業中です。子どもはこの八月で一歳なる女の子で、咲奈（さきな）といえます。夫と知り合ったのがマレーシアだったのでマレー人の女の子の名前を付けました。元々はアラビア語で、平和とか静かとか言う意味があり、パキスタンやシリア等、マレーシア以外のイスラム教国でもよくある名前なのでそうです。いつか咲奈が大きくなってそれらの国々のサキナたちに会いに行くようになったらおもしろいなあと思いますが、子どもの世話であつたという間に日が暮れる毎日を送っています。

(34号96年7月)

桜咲く国

三五年前の春、ポーランドではまだ日本人が珍しかった頃のことである。仕事でA・ヤナシユ育種研究所を訪ねていたとき、遙か極東の日本から研究者が来たと言ふことで報道

富山 信夫

記者が取材に来た……かわいいお嬢さんと一緒に、「娘のハンナです。中学生で、日本の人をまだ見たことがないと言ふので連れて来ました」と。帰国して間もなく、その時の記事

輝く春

が載った雑誌がポーランド大使館から送られてきた。何と書いてあるのだろう……Pan N. Tomiyama "w Kraju Kwinczej Wisni". 残念ながらポーランド語が判らない。辞書（ポー英）を買って引いてみたが、どの単語も載っていない。語尾がちよつと違う単語ばかりだ。察するところ桜咲く国日本の意味らしい。後日、ポ文協ポーランド語講習会のお陰で、やっと記事を読むことが出来るようになった。先日久しぶりで、『ワルシヤワの七年』（工藤幸夫著）を拾い読みしていたところ……ポーランド人はいまも昔も、日本に親しみと好意を持っていることを、日本人は知らない。彼

昨年八月末から、ポーランド最北端の港町、グダンスクに暮すようになって、はやくも九か月が過ぎようとしています。

今年の四月、最後の週のポーランドは、春さえ一気に通越して初夏を思わせる気候でした。どうやらいつもよりはかなり暖かい天候らしく、本来より気温の上がり方が早いようなのですが、その二週間前にチュウ

らが「桜咲く国」あるいは「日出ずる国」と好んで日本の美称の文字を書き連ねていることに気づいていない、……とあつた。そうか！こんなに深い意味のある表現だったのか！

三五年後、はじめて理解できたこのポーランド語Kraj Kwinczej Wisni……私とポーランド。ゴムウカ時代のポーランド、連帯運動下のポーランド、新時代のポーランド。そしてあのひと、この人、想いは廻る。追憶と期待は薄れることなく、ますます膨らんでくる。

(41号98年12月)

山川 素子

リップが咲いていたと思つたら、レングヨウや日本とはすこし品種の違う白い桜が満開になり、昼間の気温が二十度を越す日があつたとたんに、札幌では六月の花であるライラックまで咲き出して、節操がないほど「百花繚乱」なありさまです。

五月末に入った最近では、マロニエや雪柳、こでまりが盛りを過ぎ、藤に似た、黄色の花房をたわわに揺

らす、ゴールデン・シャワーや、牡丹芍薬の花が目に見え鮮やかです。

日が暮れるのもずいぶん遅くなりました。いまでは夜八時過ぎまで明るく、九時でもまだ夕方の気分です。日照時間に比例するように、花ばかりでなく、緑の方もほんとうに日ごとに成長し、木々の枝葉が伸びて青空を被っていくのがわかりました。まるでコマ落しの観察フィルムを見ているような勢いです。

夕方など、暑くも寒くもない、ほんとうに気持ちのいい気温でした。

この時期がこんなにも快適だとは全く予想していませんでした。誰もがワクワクせずにはいられない、美しい季節です。

高緯度にもかかわらず、ヨーロッパの人々がこの地で長く生きてきたのは、あんなに暗く長い、色彩を失った冬の日々の陰鬱さも一蹴されるほど、これほどまでに生気に満ちた春が訪れ、その歓びを存分に享受できるからこそなのではないかと、思うようになりました。

このあいだ、一戸だてが多い閑静な住宅地を歩く機会があり、庭々の木々や花壇がさまざまに花咲いている様子をながめていてふと感じたのですが、私が好きなフランスの画家、ボナールが描いた庭の木々の絵が丁

度こんな雰囲気をよく伝えていることに気づきました。今、手元に彼の画集がないのが残念です。

彼の暮したフランスの地では、また一味違った春なのかもしれません。が、どうして彼が庭の絵を好んで繰り返し描いたのか、少なくとも、彼が描き出そうとしていた光景が実際にはどんなものだったのか、今回初めて、少しわかったような気がして、異国での暮しならではの歓びに、またひとつ出会えたように思えました。(グダンスク大学日本語教師・45号00年6月)

ポーランドから

チェン・ドブリ!

●チェン・ドブリ! カトヴィツェのマジェーナ先生と会うことができました。翌日クラクフを案内していただき、お陰様で楽しい時間を過ごすことができました。私はあと二週間ほどウッチで研修の後、グダンスクに移ります。まだまだ片言ポーランド語ながら、ホームステイ生活を楽しくしています。これから二年間、グダンスクの大学で日本語の指導、頑張つて参ります。ではまた、札幌のみなさんにどうぞよろしくお伝え下さい。

八月九日

ウッチにて

山川 素子

(二十六期ボ語講習会参加。青年海外協力隊員として、大学で日本語教育を応援)

●ポーランド語教室の皆様お元気でしょうか。六月末、ワルシャワに無事到着、家族三人のアパート生活が始まったばかりです。アパートはワジェンキ公園の近くで、五十分おきにバスがあり、便利なところです。

クラクフ留学記

佐光伸一

一九九八年十月から二〇〇〇年六月までポーランド政府給付奨学生として、クラクフのヤギエウオ大学の文学研究科に留学した。ポーランドといえば、中世の時代から優れた文学の伝統があり、ラテン文化の深い影響のある地域なので、「本物の文学研究ができるのではないか」と希望に胸を膨らませて出発した。

一年目は学部の授業について行くようになるためポーランド語学校 Insyur Polonijny で学び、二年目からようやく大学の学科の方へと通い始めた。そもそも国文学といえば母国

ワルシャワは新しいビルが目立ち巨大なスーパーもあり想像を超えた環境にびっくりしています。

早速、ポーランド語を使ってみました。「チェン・ドブリ」

隣の奥さん、にっこりと「チェイン・ドブリ!」

七月十日

ワルシャワにて 長野 明美

(二十七期ボ語講習会参加。ワルシャワ工大へ出張中のご主人に娘さんと一緒に同行) (43号99年8月)

人は大学入学時に既に相当の知識を持っており、さらにヤギエウオ大学のポーランド学科はポーランドの中でもきわめて優秀で、現ローマ法王のヨハネ・パウロ二世、ノーベル文学賞受賞のヴィスワヴァ・シンボルスカなどそうそうたる知性を輩出している。そんなところの授業に、ポーランド語を一年間学んだぐらいの学力でついていけるわけがない。ちょうど東大国文科の「万葉集」のゼミに小学生が紛れ込んだような感じといえ、分かっていただけのだろう。ポーランド語で学ぶ「ラテン語」、

現代ポーランド語もよく分からな
いのに習う「中世ポーランド語」な
ど、不思議な体験をぜひぶんさせて
いただいた。しかし「中世ポーラン
ド語」の授業では、日本で学んだ教
会スラブ語の断片的知識のおかげで、
何度も窮地を救われた。教会スラブ
語は日本で学んだ三年間は毎年劣等
生だったが、人生どこで何が役に立
つか分かったものではない。ちなみ
に教会スラブ語劣等生は決して私だ
けではなく、先に名を挙げたヨハネ・
パウロ二世ことカロール・ヴォイテイ
ワ氏も大学時代、教会スラブ語の成
績が及第すれすれの「可」だったと
の伝説が残されている。現在七カ国
語を自由に操る語学の天才にもこん

ポーランド滞在記

二〇〇〇年八月末から一年間、語
学コースに通いながらチェンストホ
ヴァで生活をしました。私にとって
は三度目の訪問で、念願の長期滞在。
周りのみんなに助けられながら、笑
いあり涙ありのあつと言う間の一年
間でした。

学校生活

な穴があつたかと勇気づけられた。

ポーランド人にとって、ポーラン
ド文学を学ぶために遙か彼方の「桜
の花咲く国」(ポーランド語では日本
のことをこう呼ぶ)から日本人がやつ
て来たという事実そのものが感動的
であつたようで、どこでも親切にし
てもらった。持ち出し禁止の本をこつ
そり貸し出してくれた図書館の司書
のお兄さんの顔などがなつかしく思
い出される。

このように「本物の文学研究」がで
きたかどうかは定かではないが、必
修単位が半分以上残っていることは
定かなので、近い将来にもう一度ク
ラクフに戻りたいと思っている。

(49号01年10月)

柏倉涼子

ヤスナグラのすぐ近くにある大学
のポーランド語コースに在籍してい
ました。最初の一ヶ月間、初級コー
スでは朝八時四五分から二時半位ま
で休み時間も含めてポーランド語漬
けの毎日。金曜日ごとにあるテスト
の為に勉強しました。そのおかげ
か難解な文法も少しずつ理解できる
ようになり、札幌のポーランド語講

座で学んだ知識がようやくつながつ
た感じがしました。そして何より周
りがみんなポーランド人という環境
でしたので、まさしく生きたポーラ
ンド語を身近で学ぶことが出来まし
た。

中級コースになってからは、アン
ジェイキ、クリスマス、復活祭といっ
たパーティが催されたり、クラクフ
やカルヴァリア・ゼブジドフスカへ
の日帰り旅行などもありました。生
徒の数が少なかったのもあって、ク
ラスはいつもアットホームな雰囲気
でした。

人々の生活

私が始めてポーランドを訪れた時
とは比べ物にならないほど生活は豊
かでモノがあふれ、外国資本のスー
パーマーケットがいくつもありまし
た。それでも私は自分では「闇市場」
と呼んでいた(チェンストホヴァの
皆さん、ごめんなさい!)。青空市場
で新鮮な野菜や果物、パン、卵を買
うのが楽しくて毎日のようにぶらつ
いていました。なかでもポンチュキ
(ドーナツ)とロディ(アイス)が
大好きな私は、チェンストホヴァ一
帯を探索するにあちこちで食べ歩いた
りもしました。

ポーランドではよくお花をプレゼ
ントする習慣があるので、あちこち
に花屋さんがあります。比較的安価
な花束も用意されているので、ちょつ
としたお礼に利用していました。と
ころが、違う町に住む方へお花を贈
ろうと思っても、そういうサービス
はやっていないとあっさり断られ、
がっかりした記憶があります。チェ
ンストホヴァでも男性が一輪の花を
持つて歩く姿をよく目にしました。
これからきつと奥さんや彼女にプレ
ゼントするんだろうなと思うととて
もほほえましかったです。

おまわりさんに……

それはあたりも薄暗くなりかけた
大通りでのことでした。買い物帰り
で疲れていた私は思わず目の前の信
号を無視しました。すると左前方に
二人の警察官がいるではありません
か。私は目を合わせないようにうつ
むき加減でその横を通り過ぎようと
しましたが、そのうちの一人にこう
話しかけられました。
「パニ(あなた)、今、赤信号を渡り
ましたね」
「ハイ……」

帽子とマフラーの間から覗く私
の顔を見るや否や、
「世界中の一体どこで、赤信号で渡つ

ていいところなんてあるんですか？」
「いいえ、ありません……」

それから矢継ぎ早に質問の嵐！
「どこから来たんですか？」「ここで何をしているんですか？」「どこに住んでいるんですか？」「住居登録をしていますか？」「パスポートを持っていますか？」

すでに私の頭の中では「罰金」の二文字ばかりが行ったり来たりしていました。さらに、しゃべり続ける彼の一番最後に言ったことの意味がわからず、正直に「わかりません」と言うと、今度は「何てことだ、ここまで分かりますととは一体どういうことなんだ！」と半分あきれられてしまいました。ああ、もうだめだ。下手したら警察署でも連れて行かれるのでは……と思い始めた時、警官は顔を見合わせてまたアーダのコーダの言い、最後に「パニ、これからは赤信号を渡ってはいけません

よ。ドブラーノッツ（おやすみなさい）」

え？ 助かったの？ 「ドブラーノッツ！」やった、お咎め無し！
ところが狭いチェンストホヴァアのこと。翌日、友人から電話が来て、「リヨウゴ、警察から連絡が来たんだけど……」「え、警察？ なんて知ってるの？」と驚くと、友人は笑って、「それは冗談だよ。でも昨日、友達が日本人の女の子が警察に色々聞かれていますのを見たって言うからもしかしてと思つて」

はい、その通り、それは私でした！

一年を通じて、チェンストホヴァアにいる私のポーランドの家族を含め、周りの方々には大変お世話になりました。これからは私が少しでもポーランドと日本の架け橋になって、皆さんに恩返しできるように努力したいと思つています。（51号02年9月）

恋のお相手は……

菊地 多美絵

初めて「ポーランド」という国を意識してから八年、ワルシャワ初訪

問から五年、ポーランド再訪の夢が叶って、二〇〇〇年七月からの二年

間をバルト海沿岸の港町・グダンスクで過ごしました。

到着後一週間はワルシャワのホテルに滞在しました。新しい生活と不

自由な言葉、緊張の毎日の密かな楽しみは、近所の市場巡りでした。生まれて初めて山積みみのベリー類を見たときの衝撃は忘れられません。鮮やかな赤や青色を見ているだけでワクワクして元気になりました。その後、ベリー類が店頭を飾るようにになると「ああ、夏が来たなあ」と感じたものです。

街中でよく見かけた看板がありました。私と友人が分かる単語は「若鶏」のみ。続きを辞書で調べると「焼き串」となっています。これはもしかして焼き鳥……？と早速、近所のスパーに駆け込みました。期待に胸を膨らます私達の前に現れたのは、鉄棒に刺さってグルグル回転する鶏の丸焼き。ちよつとイメージとは違いましたが、おいしく頂きました。

ウッジでの語学研修中はホームステイをし、「三女」として可愛がってもらいました。ホストマザーは来日経験もあるほどの親日家で、毎晩、「アイヌ文化について」「穢れとは」など日本語でも難しい事柄について質問され、つたないポーランド語でしろもどろになりながら説明したのも良い思い出です。

週末は郊外の家庭菜園に出掛け、草むしりや野菜取りのお手伝いをしました。「これはプラム、これはいん

げん」と名前を覚えてもらい、仕事が一段落したらお茶とお菓子で休憩。これこそが本当の「ゆとり」だと思いつつ、どれだけのポーランド人がこういう生活を享受出来るのか考えさせられました。

そんな楽しい生活に別れを告げ、やってきたのがグダンスク。覚悟の上とは言え、今までとはまた違う環境に戸惑いを感じ、仕事に行き詰まると帰国を考えたこともありましたが、徐々に友人が増え行動範囲が広がるに従って、グダンスクが自分の街だと感じるようになりました。特に好きだったのが旧市街の風景。どんなに楽しい旅行に出掛けても、帰りの電車の窓から旧市庁舎や聖母マリア大聖堂の尖塔が見えてくるとホッとしました。

言葉には最後まで苦労しました。最初の半年ほど、駅では日付と行き先を書いた紙を見せて切符を購入していましたが、品物を指名しなくてはならない小売店には怖くて入れませんでした。いつまでも避けている訳にもいかないので勇気を振り絞って使っているうちに舌が慣れましたが、辛抱強く注文を聞いてくれた近所の駅員・店員さん達には心から感謝しています。

買い物と言えば、全ての商品が

キログラム表示なのにも困りました。日本ではパック売りがほとんどで、一人分のハムが何百グラムかなんて気にしたこともありませんでしたから。「ベーコン(ポチエック)」と「コウノトリ(ポチャン)」が似た音なので、ポーランド人はコウノトリを食べるのかと驚いた話は、友人お気に入りの笑い話となりました。ポーランドのために一肌脱ごう!

ワルシャワ滞在記

安藤 むつみ

と意気込んで出発したはずが、色々な人に支えられ、私が育ててもらった2年間でした。EU加盟に向けて変動しているポーランドを生で感じられたのも貴重な経験でした。第二の故郷・ポーランドを好きになればなるほど溶け込めない外国人の自分を感じ、今は切ない片思いですが、いつかこの想いが届くことを願っています。(52号03年3月)

一九九四年十月一日、私達家族三人はそれぞれ大きな不安と少しの期待を抱いて十か月間のワルシャワ生活の第一歩を踏み出しました。

主人のワルシャワ大学日本学科勤務に伴ってのことでしたが、半年後に卒業式を控え大好きな桑園小学校の仲間と一緒に卒業したいと言い張る息子を、「二月末に母子で帰って来よう」と約束をして半ば無理矢理に連れて行ったのでした。帰国後の中学校への転入も不安でしたし、いやがる息子を引っぱって行くのは私達にとっても大きな「賭」でしたが、良い事も悪い事も家族一緒に経験したいと願う一心でした。

まず降り立ったオケンチェ空港が新しくきれいなのに驚き、これからの生活は私の予想(かなり覚悟をしていた)とは違うのかもしれないと思いつつ、これからの住まいとなるソクラテスホテルに車で向かい走るにつれ、私の気分は急に期待を持った分だけみるみる暗くなつていき、部屋に入ってからというものの、回りを歩いてみようと言う主人と息子の声をよそに私は猛烈に部屋中の掃除を始めました……。そのうち日本から送った荷物も次々届き、近くのバザールで必要な物も少しずつ買い揃え、やっとゆっくりお風呂にも入れるようになった(ー!)頃、急



ワルシャワの小学校との交歓会

に私の顔一面に赤い発疹が出来ました。どんどん増えていくので大使館内の女医先生に診ていただいたところ、水が合わないからミネラルウォーターで洗顔するようにと言われて軟膏をもらったものの、とても十か月間ミネラルウォーターで洗顔する気になれず、その後大学の先生が心配してポーランドのドクターの所に連れて行って下さいました。そこでは数種類のビタミン剤などが出されましたが、必要に迫られて恐る恐る化粧したのはポーランドに着いてから三週間ほど経っていました。ちなみに私の知り合った日本人女性の多くはホテルの美容院で髪を整えていたようですが、私はあえて近くのバザールの中にある美容院に行き、パ-

マをかける時はお客自らがロットと紙を伸ばして美容師さんに一つずつ手渡すように要求され、おかげで退屈することもありませんでした。他の店などでもそうでしたが、この美容室でも私を珍しがる風もなく自然に接してくれましたし、もちろん言葉はダメなので紙に絵を書いて見せると何の問題もなく私の思うようにしてくれました。

息子はワルシャワに着いた翌日から日本人学校に通い始めました。校舎の壁に銃弾の跡がいくつも残っている住宅地にある仮住まいの一軒家で、当時は小学一年から中学三年までの二十数名の生徒と十一名の先生がいました。息子が入った時は同じ六年生が他に三名いましたが、その

うち二名は小学校卒業後ロンドンにある日本の大学の附属校（寄宿舎生活）にいつてしまいましたので、中学一年の授業は二人の生徒に一人の先生という有難いものでした。

学校ではポーランド語の先生と用務員さんを除いては全員日本人の先生と日本の教科書を使って勉強しますが、色々な施設や工場などへの見学その他時々ワルシャワの小学校との交歓会などもあり、授業に柔道を取り入れているという珍しい学校（26番小学校別名ジゴロー（嘉納治五郎）小学校）の日本フェスティバルに招かれた時は私達母親も豚汁などを作って子供達に喜ばれました。食事はコミュニケーションの場をとりもってくれるので、主人が授業を持っていたワルシャワ大学日本学科の学生を招いて一緒にお寿司作りしたり、その後お返しに学生達がポーランド料理を作ってパーティを開いて下さったりと、私も子供や主人を通して楽しい体験を持つことが出来ました。

中シヨパン音楽院の先生にピアノのレッスンをお願いし、その時ばかりは主人も子供もいない留学生の気分が音楽院に通いました。先生は「言葉が出来なくても問題ない」とおっしゃって下さいましたので通訳もなしで貴重なレッスンを受け通してしまったのですが、ポーランド語はわからないと言っている私に向かつて喋ることしやべること。それでもシヨパンの曲を通してのことなのでなんとなく……自分なりに……解釈し、ポロネーズのレッスンは先生が背すじを伸ばして実際に歩いてステップを踏んでみて下さり、また私の頼りない演奏にむずかしい顔をしながらも「美しい！」と励まして下さったりしたおかげで、それまで特別視してなかなか手を出すことが出来なかつたシヨパンの曲を私なりに弾いてもいいのかもしれないと思えるようになりました。数回ポーランドの先生のレッスンを受けたからといって急に今まで弾けなかつたものが弾けるようになるわけではないのですが、私自身シヨパンが二十年間暮らした街を歩いたりポーランドの歴史とシヨパンの時代を思いめぐらしていくうちに、それまで自分からはあまりに遠い所にいた人間シヨパンの心情を少しは察することが出来たよう

な気がします。

私達のワルシャワ生活を振り返ると色んな場面や場所が次々浮かんできますが、とても安い料金で何度も出かけることのできた国立オペラ劇場と、オペラ・カメラルナと呼ばれる室内歌劇場のあたりが特になつかしく思い出されます。そしてコンサートの夜の食事はオペラ劇場近くの中華料理か、その先にあるケンタッキーフライドチキンだっけ……とか。もちろんポーランド料理は美味しいものがいっぱい、特にアイスクリームやソーセージは、帰国後息子が生意気に「日本のはまずい」と言っていて困りました。ワルシャワではその年、第五回目のモーツアルトフェスティバルが六月十五日から七月二六日まで開催されていて、私達は連日のプログラムの中から教会で「レクイエム」を、王宮で室内楽を、そしてオペラ・カメラルナでは代表的なもの他に、珍しい初期のオペラ等も観ることが出来ました。特に息子の大好きな「魔笛」は三回も観たのですが、最後は座席券ががとれず、二百円で座布団が渡され、それを階段に敷いて座って観たことも楽しい思い出です。オペラというと大きな劇場で壮大なスペクタクルを味わうものだと思っていました、二百余席の客席

のすぐ目の前で小さなステージいっぱい原色の衣装をつけた歌手達が素晴らしい声を聴かせてくれるのですから、はじめは学校の学芸会を観ているよう（ひどい！！）な感覚でしたが、私達はすぐにすっかりこのオペラ・カメラルナに魅せられてしまいました。国立劇場では、私達お気に入りの席（ステージを左下に見下ろす、これもまた安い料金のボツ



ワルシャワ大生
手作りの寿司パーティー

クス席)で気楽な姿勢でゆったり観られるのもぜいたくなものでした。

多感な一二、一三才をポーランドの地で暮らした息子は学校の内と外で様々なことを感じ色々な面で頑張り成長したような気がします。私達は熱心に言葉を覚える努力をせず一日一日過ごすだけで精一杯でしたので、ポーランドに関する知識はさほど身につかないでしまいました。が、悲惨な歴史を重ねてきたポーランドの人々のしなやかな強さ、美しさ、明るさ、気高さを、あちこちに戦争の記憶を残している街を歩きながらもすっかり感じました。また滞在中に日本から飛び込んできた地下鉄サリン事件と阪神・淡路大震災のニュースは、日本から遠く離れた地に居る様々な事を考えさせられました。もちろん日本を離れる前の母子の



ジェラソヴァ・ヴォーラの
ショパン・モニュメント前

「約束」は成田を飛び立った瞬間に消えていて、日本を離れたときと全く同じように、帰りの空港に向かう途中日本人学校に寄って日宿だった先生とフェンス越しに最後の挨拶をし、夏休み中にもかかわらず集まって下さったたくさんのお友達に見送られて、八月九日私達は三人揃ってポーランドに別れを告げました。日本から持っていった子供サイズのヴァイオリンはフルサイズの立派なものに変わり、息子の腕にすっかり抱えられていました。その息子も今は大学生になり一人暮らしをしています。先日帰省した折りに三人一緒に映画「戦場のピアニスト」を観に行き、懐かしい通りを画面に見つけて思わず顔を見合わせたものでした。

(53号03年9月)

ポーランド料理 (8)

Placki ziemniaczane ジャガイモのプラツキ

《材料》

ジャガイモ (皮をむいた状態で)	400g
玉ねぎのすりおろし	大さじ1
とき玉子	1/4個
小麦粉	大さじ1
サラダ油	大さじ2~3

《作り方》

- ①ジャガイモは皮をむいてしばらく水にさらし、目の粗いおろし金ですりおろす。そこへ玉ねぎのすりおろしととき玉子、小麦粉を加えてまぜる。
- ②サラダ油大さじ2~3をフライパンに熱し、そこへ①の半量を入れてならし、中火でふたをして1分弱焼く。下側にこげめがついたくらいの時に、火を弱め、こげつきをへらではがしながら何度か適当に裏返して全体に火が通ってすきとおった感じになるまで焼く。
- ③フライパンをきれいにし、残りの半量も同様に焼く。
- ④皿にとり、塩をつけながらいただく。

(工藤久代「ポーランド月報」第38号より)

* プラツキは、辞書で見るとパンケーキと訳されています。

* レマルクの『西部戦線異常なし』(秦豊吉訳)に「ジャガイモのパンケーキ」と出てくるのは、このプラツキです。

* ポーランドでは、このプラツキに砂糖をかけて食べることもあるそうです。マジエナさんは、きのこのソースでいただくそうです。